

MINI SET
最強提督

育成計画





むふふ…



ここが
鎮守府か



おおー

桜が舞う季節に、
俺は海軍兵学校
を卒業し、鎮守
府に配属された



この先に、バラ色
のハーレム生活が
俺を待っている！



ぐわ！



よし、その第一歩
を踏み出そう！



害虫が迷い込んだと思えば、人だったか！

見るからに頼り無さそうだな！

そういえば就任日は今日だったな

うふふ、また新しいおもちゃがやってきたわ

な、なんだその身長！



？

なんだこりや



面白い事言うな！艦娘だからこのサイズが当たり前前だろ？

離せ！俺は提督様だぞ！

提督？ここにこんな職位は無いぞ！

体をよじって、本当に虫みたいな！

委任状にちゃんと書いてあったでしょ！テイトク横って、あれは低種特殊労働者様って意味なのよ

ん、何か勘違いしてない？

なに！

本来艦娘たちを手中に収め、酒池肉林を目論んでいる提督は、バスケットボールのコートよりも広い金剛の足裏の筋を一つ一つ懸命に掃除している

金剛：「何々提督様！いや、低価、と、特殊ろ、労働者様？早くして、紅茶がもう冷めちゃったよ」

提督：「今提督って言ったよね？それに低価特殊労働者様って言いにくいかないか」

金剛：「Oo?言ってるないし、いい、言いにくいなネー！」

間違いを誤魔化そうとして、足を揺らし始める

驚いた小さな提督が、懸命に金剛の足にへばり付いている

まだ洗い切っていない足の匂いが、容赦なく提督に襲い掛かる

金剛：「Oo?そんなに私の足が好きなの？しょうがないネー」ご褒美に踏んであげマース！

提督：「馬鹿か！」



海上護衛

天龍：「ラフ、怖いかな？ 役立たずのチビ！」

天龍が伸ばした、熱を帯びている巨大な足裏が、両方から提督に押し迫る。これが彼女が考え出した四肢を鍛錬するトレーニングだ。

龍田：「まともに労働も出来ないあなたのために私達がわざわざ特訓してあげるんだから、感謝してよね。」

目の前の龍田の白く光っている刃を見て、逃走を諦めた提督は必死に両手を天龍の両足に押し付け、猛烈な足臭に耐えている。



龍田・「あら、やっぱり天龍ちゃんは人を虐める時が一番可愛いわ」

天龍・「ちよっ、何するんだ!」

提督・「わあああ!」

天龍の胸を揉みながら、欲望に身を投じた龍田は自分の体を天龍に押し付ける刺激を受けた天龍は、思わず両足を閉じてしまった。

巨大な艦娘の汗と体温で蒸れた足の間が蒸籠と化し、身動きの取れない提督をあぶり続けているしよっぱい汗が提督の体を蝕み、口の中にも入り込んでいた二人の艦娘の「愛」味わいながら、提督の精神が痺れていくそして、天龍の両足の指の間で気絶してしまった



ビスマルク：「貴方が新しく入ってきた労働者ね
私が直々に鍛えてあげるから、入りなさい。」

冷酷な目をしているビスマルクと傍に脱ぎ捨てられたス
トッキングを見上げる提督は、嫌な予感しかしなかった

提督：「いや…遠慮させてもらあぁ〜」

拒絶する権利もなく、提督がス
トッキングに投げ込まれた。
密封された空間の中にビスマル
クが足を伸ばす

ビスマルク：「今の貴方は弱すぎるわ 私たちの足元でいつ死
んでもおかしくない状態よ 出来るだけ長生きしたければ、努
力してこの中から這い上がりなさい！」

体格差があまりにも大きく、ビスマルクの柔らかいはずの足
裏も壁のように感じる提督は、漁網のようなストッキングの
中で蒸れた足から溢れ出す汗にまみれ一寸も動けない。

提督：「だ、だめだ…動けない…」

ビスマルク：「私はこのままでもいいの
よ？ 足の指に挟まれないように頑張っ
てね もし私を満足させられたらご褒美
を上げてもいいわ。」

提督：「そこは、感謝すべきなのかな…」
ビスマルク：「それじゃ、靴を履くわね！」

提督：「やめてー！」



加賀・「食べ物盗んで赤城さんを泣かせた害虫はどこに逃げたのかしら？」

提督・「うわわ…」

なんで加賀を怒られたのか全く理解でき
ない提督は影に隠れて震えている
つい先日、ボーキサイトを新装備開発
につぎ込んでからこの有様だ。

提督を追っている加賀は胸を地面に押し付け、
四つん這いになって周囲に視線を巡らせる
次々と乳圧による地面の振動が提督を襲う
もし見つかったら、その乳で押し潰されてしま
うだろう
ちよっと気持ちいいかも…？

駄目だ！死ぬんだぞ、何考えてるんだ。



提督：「こ、ここはまさか？」

ようやく加賀から逃げ切った提督だったが、またしても危機にさらされていた。ここは艦娘の更衣室。まるで高層ビルのようなロッカーと巨大な椅子に眩暈さえした提督は、思いつきり黒くて柔らかい物体にぶつかって頭をあげると、明らかにサイズの合わない服を着ている戦艦長門の黒いストッキングを履いた足が目の前に聳えている。

提督：「あははは…長門様…今日はいいい天気ですね…あ、時津風さんの服ですね、それ似合ってますよ」

「…遺言は終わったか 奴隷？」
そう言うと、怖い表情を浮かべる。

提督：「わあ！」

少女の体温が残っている服装を身にまとったロリコン戦艦長門は提督の口を永遠に封じようと決意した！

長門：「死ね！」

色濃いストッキングを履いてる巨大な足裏が、上空から勢いよく降ろされた。



意を決し、鎮守府から脱走しようとしている提督が救命浮き輪をつけて、海上を漂流していると轟音とともに、うしろから、波の飛沫を飛ばしながら、鎮守府最速を誇る島風がまっすぐに向かってきている。

提督・「くそ！もつ気付かれたか？」

島風・「おっそいチビちゃん。この島風がいる限り脱出は不可能よ！」

虫けらを見下ろすように、島風の巨足が提督の頭上を通り過ぎる。もう少しで提督を海底に蹴り落とすところだった。

おいおい、どこに行くんだ？俺を捕まえに来たんじゃないのか
そうツッコもうとすると、前方の水面が突然動き始め、大量の
飛沫が周辺に飛び散る。





深、深海
棲艦襲来!



まさか…



!?



なんという運だ…
逃げる時に敵と
鉢合わせなんて…



ははは！今日
も一緒に遊ぼう
ぜ、人間共！



やばっ



艦娘たち
…出撃だ



胸に提督あり！
提督の見事な指揮により、
深海棲艦との戦いの勝利を取めた



愛宕：「逃げちゃだめですよ。わんぱくな提督様に罰を課さないとね！」

高雄：「ああ…どうでしょうか…？」

巨大な重巡洋艦が提督をつまみ上げ、巨大な胸の上に置き揉み始める。二人の温かく柔らかい胸に挟まれる小さい提督

愛宕：「ふふ、愛宕のおっぱい、好きですか！」

高雄：「高雄のもちちゃんと感じて…」

提督：「うん…やわらかい…でも…呼吸が…」

この蒸し暑くても気持ちいい罰はまだまた続く。



龍驤&大鳳：「へへ、今度は私たちの番だよ！」

高雄と愛宕を手本に、龍驤と大鳳も提督を二人の胸の間に挟み込む。

提督：「くくくっ！」

龍驤：「うっ…これ、ちよつちやり難いなあ。」

大鳳：「罰はこれでなければならぬの？ 疲れるわ…」

提督：「それはこっちのセリフだ！ ピクニックからいきなりロッククライミングに変わったようなもんだぞ！」

大鳳：「な、なんですって？」

龍驤：「ほく、キミイ、ピクニックの方が好きなん？ じゃ山でも作ってあげよっか。胸の谷間ってこうやって作るんやでえ…！」

黒い笑みを浮かべ、力いっぱい胸を押し始めた龍驤。

大鳳：「ふふ…ではでは提督様。山の風景をたっぷり楽しんで下さいね。んっ…！」

龍驤：「どや、提督様？」

提督：「やめろー！」

激痛の中で、気絶した提督を待っている艦娘はまだいっぱいいるようだ…

相変わらず、モップを手に、艦娘の足掃除の仕事をしている提督
タオルを纏っている隼鷹が優雅に酒を飲みながら、温泉に浸かり体を癒している。

隼鷹：「お疲れ様！提督様も入れば？
体から疲れが取れるよ〜」

提督：「え…」

提督が反応する間もなく、隼鷹に捕
まれ、巨乳の谷間に放り込まれた。
頭から大量の日本酒を浴び、やがて
酒が胸の谷間に充満した

「えっと、これも酒池肉林と言えるかな？」
胸の谷間に囲まれ、酒の温泉に浸かっている提督

「はは、提督様も男だな。」
豪快に笑った隼鷹が二息に酒を飲み干した。

こうして、鎮守府がまた平和な二日を過ごしたのだ。



